
空の下敷きに。

葵介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の下敷きに。

【Nコード】

N1454D

【作者名】

葵介

【あらすじ】

普通の中学生、れいと亮汰はある異質な能力を持っていた。そして、その能力故に二人は戦いの世界へと放り込まれる。守るべきものを守るため愛する人を愛し続けるため二人の戦いは、今始まる。

第一章：僕と僕。

HR始めるぞ、と怒鳴る教師の耳障りな音が耳の奥をかすめる。

この前の席替えで運のいいことに窓際の席に座ることができた僕は、
頬杖をつきながら

かすかに紫がかった夕焼けを眺めていた。

耳を通りぬける教師の声をどこか遠くで聞きながら、うつらうつら
と眠りに入っていたそのさなか、いきなり肩をぐいっとひかれ、後
ろを向かされる。

「なあ、れい。帰りがけマック寄らね？」

そう言っただけで悪戯っぽく笑う少年——金崎亮汰は僕の一番の親友だ。
中学生三年生とは思えない大人びた顔立ちに、茶髪に耳に光る多数
のピアス。

見た目は不良だが、子供のようなあどけなさを持つこの少年は、学
年でも一、二を争う人気ぶりだ。

僕と亮汰は中学校一年のときに同じクラスになったことがきっかけ
で、以来兄弟のように過ごしている。

僕達が一緒にいる理由は、もちろん気が合っし親友だからというこ
とに変わりはないのだが、
もう一つ別の理由がある。

それは、僕らには不思議な能力があるからだ。

ほかの人には持っていない、不思議な力。

他人には隠していた力だけれど、こうして互いに異端な能力につい
て話し合うことができるので、僕達は一緒にいる。

「今日は、遠慮しとくよ」

気だるそうな僕の声を聞いて、途端に亮汰がなんでだよと、しかめっ面をし——ふいにあ、と声を上げた。

「うるさいんだな？ もう一人のお前が」

「そういうこと。今日は家でゲームがしたいんだと」

そう、僕の不思議な力——それは心の中にもう一人の自分がいること。

物心ついたときから、“僕”は心の中にいた。

もちろん、身体の主導権は僕が握っているのだけれど、“僕”にはちゃんと意志が宿っている。

温厚な僕と違って、気性は荒くておおざっぱ、おまけに口も悪い。けれども、誰よりも“僕”は優しい心を持っている。

僕は心の中で“僕”に語りかけた。

「明日は亮汰とマツク行くからね」

すると心の中の“僕”はわかってるよ、と鼻を鳴らした。

『今日亮汰も呼んで、一緒にゲームしたらどうだよ?』

「あ、それいいかもね」

心なしか肩を落としているように見える亮汰に、一緒に家でゲームしないかと誘うと、途端に彼は顔を輝かせた。

「行く!」

予鈴が鳴り、皆がさあ帰ろうと教室を飛び出した。僕達も暮れ行く夕日を背に家へと向かっていった。

このとき、僕等は気づいてなかった。

後ろを着けてくる黒い影に――。

そして僕達は、やがて深い闇の世界へと放り投げられるのだ。異質な能力を持っているゆえに――。

第二章：亮汰の能力。

「さすがゲーマー。天才亮汰が一勝もできないなんてね」

『ったりめーだ！ 俺様に勝つなんざ百年早いんだよ、って亮汰に言っといてくれ』

心の中で“僕”が自慢げに微笑む様子が目に浮かんで、思わず苦笑した。

僕達は決して一心同体ではない。強いていうなら二重人格というわけでもない。

身体の神経や声帯、全ての主導権は僕が握っているの、“僕”は身体を動かすこともできないし、声も出すことができない。

けれども、僕が望めば“僕”に一部の神経を貸してやることができる。

今も僕が腕の神経を“僕”に貸してやったおかげで“僕”はゲームができたのだ。

もちろん声帯も貸すことができるが、一度も貸してあげたことはない。

なぜかって？ あいつは口が悪いから何を言っかわからないからさ！

「俺様に勝つなんざ百年早いんだよ、クソ亮汰君、だつてさ」

友達から天才ゲーマー亮汰、と称されている自分が“僕”に負けた

のがよほど悔しかったのだろうか、うわの空で窓辺に座っている亮汰。
そんな彼に追い討ちをかけるように意地悪く言っていると、亮汰はますます落ち込んでがっくりとうなだれた。

『おい、クソ亮汰君なんて俺言ってるぞ』

「見事に落ち込んだじゃったね」

『俺よりお前のほうが性格悪いな』

二人でくすくすと笑っていると、下の階から母の声が響いた。

「れいー！洗濯物取り込むの手伝ってー！」

「今亮汰と遊んでるからあと10分待ってー」

母に負け時と大声で言つと、さらに大きな怒鳴り声が僕の耳を直撃した。

「いいから早くきなさい！」

耳をつんざくような母の甲高い声はどうにかならないものだろうか、
とため息をついて重い腰をゆっくりと上げた。

今だにすねた子供のように窓辺に座って空を仰いでいる亮汰。しば
らくその背中を見つめているうちに、いいことを思いついた。

亮汰を元氣付ける方法を。

「ねえ、亮汰。僕今から洗濯物取り込みに行かなきゃいけないんだ
けど、めんどくさいんだよね。だからさ……」

あれやってよ

そう言つと、亮汰の耳がピクリと動いた。

わかりやすい奴だ、と“僕”が心の中でほくそ笑む。

もう一押しだとばかりに僕はささやいた。

「あんなことできると亮汰しかないからさ。ほら、早く！」

どうやら作戦成功のようだ。こちらをゆっくりと振り向いた亮汰の
顔には、いつもの自信に満ち溢れた晴れやかな笑顔が浮かんでいた。

「俺まだ30分しかできないけど、それでもいいのか？」

「もちろん！ 30分あれば“僕”と亮汰でもう一試合ゲームできるじゃん」

亮汰は笑顔でうなずくと、目を閉じ両手をすばやく空中で動かした。部屋の温度がすーっ、と下がる。ぴんと空気が張りつめ、聞こえるのは窓から吹き込む秋風だけになった。

固唾を呑んで見守る僕をよそに、亮汰はぶつぶつと呟き始めた。何を言っているのかわからない。日本語ではないようだ。

亮汰のうなじから汗が滴り落ちた途端、彼の目がかっと見開かれた。

「タイムアウト！」

その言葉が空気の波となって伝わり、僕は後ろに吹き飛ばされドアに頭を強く打った。その波はドアをすり抜け下の階へと進み、町全体、国全体へ……。そして地球全体へと広がった。

時が止まった瞬間だった

「亮汰の力に叶う奴はいないね。…痛て…っ頭打っちゃった」

「へっ。どんなもんだ！」

そう、亮汰の能力は時を止める力があること。その間、人間達は石像のように固まって動かなくなる。

けれども亮汰が心の中で念じたので、僕は動けるのだ。

その能力があることに気づいたのは小学校四年生のころだったそう
だ。最初は10秒止められるのが限界だったのだが、毎日練習を積
み重ねるうちに今では最高30分止められるようになっていた。
彼も僕同様、どうしてこんな能力があるのかわからないでいる。

「俺達……一体何者なんだろうな」

心の中にもう一人の“僕”が同居している僕。
時を止める力がある亮汰。

時折、僕達は自分自身に恐怖を覚えることがある。

僕達は一体何者なんだろう、と――。

「それよりさ！ 早くゲームしようよ」

陰気な雰囲気を取り払おうと、手をぱんぱんと叩いて促すと彼はに
こりとうなずいた。

「次は負けねえぞ！」

第三章：予言

「今日ね学校で先生に字が上手ねって褒められたの！」

夕食時、いつも食卓をにぎわすのは妹の來夢きむの声だ。

來夢という名前は、明るい未来が来ますようにという意味で僕が名づけた。

少し生意気なところもあるけれど、賢くて元気な僕の自慢の妹だ。

「そうか。じゃあその綺麗な字でパパに手紙書いてくれ」

「ママにも書いてよ」

「えー。お兄ちゃんに書く！　ねえ、お兄……ちゃん？」

どうやらぼーっとしていたらしい。

妹の言葉でようやくはっとしたころには、母と父と妹がげげんな目で見つめていた。

「あー、うん。何が？」

「……もうお兄ちゃん人の話聞いてよ！」

頬をふくらませる妹に軽く謝って、ごちそう様と席を立った。
二階の部屋に上がろうとすると、すかさず母に呼び止められる。

「風邪でも引いてるんじゃない？ ばーっとしてたけど」

「うっん、大丈夫だから」

体調が悪いわけではない。

ただ、亮汰の言葉が耳にこびりついて離れないのだ。

“俺達一体何者なんだろうな”

答えのない疑問が、頭の中をぐるぐると――まるで渦のように駆け巡る。

見た目は普通の人間。

けれど、誰にも持っていない能力がある。

僕は普通に親から生まれ、普通の子と同じように育ってきた。
なのに――。

時折、そんな自分に恐怖すら覚える。

僕は一体“何”なんだ――。

けれど、幾ら自分に問うてみても、答えが出るわけでもない。

「はあ……。お前一体誰なんだよ」

『知るか。こっちが聞きたいぜ、まったく』

それっきり会話はなく、部屋のベッドに寝転び天井をひたすら見上げていた。

テレビから流れるドラマのBGMがやけに大きく聞こえる。

「普通の人間に生まれたかった」

僕の本音が聞こえたのか、“僕”は何も言わずただ黙り込んでいた。

小鳥がせわしなく鳴く音が、遠くから聞こえてくる。

そして、意識がふわりと浮上した。

まだ寝ていたいという欲求を無理やり押さえ込み、目を開いて——
すつとんきょうな声を上げた。

「9時だ！ 遅刻しちゃう！」

起こしてくれなかった母に軽い憎しみを覚え、いそいそと顔を洗った。

こういうときは僕より運動神経のいい“僕”に神経を貸して、猛スピードで学校へ行ってもらうしかない。

頭脳は僕のほうが格段に上だが、悔しいことに僕より“僕”のほうが運動神経は遥かに勝っている。

さっそく、心の中で“僕”に呼びかけた。

「今から神経貸すから、早く学校に行こう!」

返事がない。もう一度心の中で強く呼びかけた。

「おい! どうしたんだ?」

それでも返事はない。

イライラと着がえながら貧乏ゆすりをしていると、ふいに“僕”の声が聞こえた。

いつもの“僕”とは思えない低い、暗い、声。

『来る……』

「え? 何が?」

寝ぼけてるんじゃないか、とぼやこうとして、やめた。

“僕”は僕の心の中にいるので寝ることはできない。

それに“僕”の声は明らかに寝ぼけて言っているものとは思えなかった。

この世の終わりを見たのではないかと思うくらい、影を含んだ声だった。

『おい、覚悟しとけ………』

「…つたく、何の話だよ？」

『奴らが来る………』

イライラがピークに達したその瞬間、“僕”がとんでもないことを言い出した。

じきお前は——全てを失う——

それきり、“僕”は口をつぐんだまま、僕の呼びかけにも答えず黙ったままだった。

そして僕がこの言葉の意味を理解するのは、もう少し後になる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1454d/>

空の下敷きに。

2010年12月18日19時04分発行